

京都から滋賀へ、そして全国へ

京都に本教が伝わったのは明治のごく初期であろう。伏見や七條あたりに信仰者がいたという。しかしこれは伝説的に伝わった、今となつては雲をつかむような話である。

現在につながる京都の信仰は奥六兵衛の入信をもって始まる。奥は西陣織問屋の裕福な家に生まれた教養人だった。明治9年、河内の親類宅に居合わせた時、山本利三郎が神様の話しを説いているのを耳にし入信した。

奥は心学や陰陽道の素養があり、それらになぞらえ本教を説いた。初めて聞いた人も理解しやすかったであろう。奥を師と仰ぐ人が次第に増え、明誠社という講を結んだ。その中に後に河原町分教会初代会長になる深谷源次郎もいた。

しばらくして奥と深谷は信仰信念の相違から袂を分かち、深谷源次郎を講元とする斯道会は発展し、京都のみならず滋賀や北陸、さらに全国の至る所に伸び広がっていく。今回は京都から滋賀に伝わった信仰がさらに全国へ伸展する話を述べたい。

斯道会は京都の中心部に拠点を置き、やがて滋賀県湖西地方、さらに若狭方面に伸びて行く。一方、南の宇治田原、湯屋谷の西野清兵衛とも関係ができる。西野は明治11年頃から信仰していたというが、どこから伝わったのか、時代が古くやや不明確である。『天理教河原町大教会史』によると、河内方面から来ていた茶摘み女性が伝えたという話や、直接教祖から教えを聞いたともいう。いずれもはっきりしないが明治16年頃、斯道会との関係が生じた。

現在、河原町大教会から直接、または間接に分離した大教会が35カ所ある。これだけ発展するのは河原町の信仰が滋賀県に入って、さらに各地へ大きく伸展するからである。

滋賀県には大教会が6カ所ある。その全てが京都（河原町大教会）を経た伝道で、しかも宇治田原という小さなお茶の産地を経由しての伝道である。

滋賀県内6カ所の大教会を経て各地に伸び、大教会になった所が20カ所ある。滋賀県の6と合わせると26カ所にもなる。26の大教会に所属する教会を合計すると、2,633（立教175年4月）である。近江（滋賀県）という風土にこれだけの発展を生み出す素地が存在するのなら、それはいったい何であろう。

2,633の教会が誕生する過程において、いくつかの遠隔地伝道が試みられた。その結果、滋賀から遠く離れた所に信仰が根付いた例がかなりある。例えば、栃木県日光、福岡県直方、秋田県角館、同阿仁、同六郷、埼玉県秩父、青森県小南部、北海道網走などへの遠隔地伝道があり、直接、間接の違いはあっても全て滋賀県を経由しての伝道である（「遠隔地伝道」については項をあらため触れる予定）。滋賀県がこうしたことを生み出すものを包含していると考えるとき、思いつくのが「近江商人」の資質である。

近江商人は行商から店舗を構える場合まで様々だが、地元である滋賀と商売をする出先とを行き来することは共通しており、出先の店舗が地元より大きい場合がよく見られる。同様に滋賀の布教師が遠方に適当な布教地を定め、そこで大きな成果を生み出す。不思議であるが、なぜかこうしたケースが見られる。

福岡の筑紫大教会の端緒は湖東地方の蚊帳売り商人堤丑松が

明治24年、直方におもむいたときのおたすけである。堤は病氣の子どもをたすけたが商売人なのでやがて滋賀へ戻る。その後、不思議な神様の教えを求めて福原惣太郎らが福岡県から滋賀県湖東支教会へ参拝し、さらに京都の河原町分教会、おぢばへと足を運んで信仰を固め、筑紫をはじめ西海、朝倉、鎮西などの大教会へ発展する。

同じく湖東地方の近江商人速水久治良は入信すると明治23年、遠く栃木県へ布教に出ることを決心する。速水は地元で農業と商売をてがけ、栃木県間々田では雑貨の店を持っていた。布教を思いついたのは、関東にはこの有り難い信仰はまだ伝わっていないだろうと考えたからだという。いくら店を所持しているとはいえ、入信早々栃木県にまで布教に行こうという心はどこから出るのだろうか。近江商人の気質と言えば短絡すぎるだろうか。速水は間々田での布教を人に任せ、自らは日光に出た。日光、都賀、中根、那美岐の各大教会はここから始まる。

滋賀県の草津線鉄道敷設工事に静岡から来ていた鈴木半次郎は甲賀谷に住む水口系布教師から匂いをかけられ明治22年入信。おぢばに参拝し、信仰の息吹に触れた。工事が終わり帰郷すると積極的におたすけを始め、不思議な働きを見せられた。これが後の嶽東大教会の始まりである。

鈴木は滋賀県人ではない。前2件の遠隔地伝道とは異なるが滋賀を経た遠隔地への伝道としてここに挙げた。後、嶽東から佐野原、秦野、沼津の大教会が出来、青森県小南部大教会、北海道網走大教会へも道を伸ばす。

まだほかにも滋賀県を経て遠方へ伝わった信仰がある。甲賀大教会から伸びた秩父大教会、鈴鹿の山々を超えて伝わった岐美大教会と東濃大教会。湖東大教会からも遠く秋田県阿仁へ伝わり、県内かなりの教会が出来た。

ここに書いた伝道史実はみな明治期のことである。現在とは交通事情が違い、関東や東北は一度布教に出るとたやすく戻ってこれない距離である。このような場所に出かけ成果を生み出した滋賀県人のおたすけは本教伝道史上、特筆されるべきものと言っている。

もちろん、近江商人でなくとも、また滋賀県人でなくとも遠方へ布教に出た人はたくさんある。「たすけられたご恩を返すためにはこの教えをまだ知らない人に伝え、その人をたすけることだ」と聞かされた人が布教地を選ぼうとするとき、本教未開拓地を遠方に求めたのであろう。しかし、中でも近江商人気質を持つ滋賀県人は遠方へ布教しようという気概を自然に身につけていたと言い得るかもしれない。

最後に、滋賀県内教会総数は230（立教175年4月）である。大教会が6カ所もあるにしては多くない。近畿では最も少ない。仮に6大教会の部内教会が近辺にあれば四、五百の教会数であってもおかしくない。これは滋賀県の教勢が振るわないと言っているのではない。大教会をはじめ、有力な教会が部内教会を県外（遠方）にたくさん持っていることの現れだと言いたいのである。滋賀県の大教会数と教会総数の比率は、滋賀の風土が遠方へ伸び広がる布教拠点としての教会を生み出した結果だと言いたい。